

生産工程における品質管理にかかわる問題領域は、従来社会学において著しく研究が手薄な領域であった。すなわち、経営管理を扱う経営社会学、労務管理や労使関係を扱う労働社会学の狭間にあつて、品質管理に関する本格的な記述、分析の空白が久しく続いてきた。とりわけ、1970年代、80年代のQCサークルブームに象徴される日本型生産システム論に触発された議論には、学術的な手続や問題設定が不明瞭なままサクセスストーリーの提示に傾く場合が少なくなかった。

本論文は、日本企業の小集団活動の丹念な記述、分析を行うことによってこのような研究の空隙を埋めようとする試みである。1章では小集団活動による品質管理が日本の生産工程で受容され、定着、展開する過程の解明という課題が設定される。2章で小集団活動に関する研究の背景が述べられる。3章で小集団活動の実施状況がマクロ統計データを用いて検討される。4章で日科技連を事例に小集団活動が普及した要因が検討される。5章で東芝府中工場を事例に計画と実行の統合がすすむ過程が検討される。6章で東芝柳町工場を事例に計画と実行の統合の変化が検討される。7章で日本で小集団活動が受容された要因がまとめて考察される。8章で結論とその含意が述べられる。

本論文の新味は、テイラーリズムに関するブレイバーマンの研究以降提起された、「計画と実行の分離」をめぐる労働過程論と関連づけて、個別事例の丹念な記述、分析がすすめられている点にもとめられる。すなわち、著者は、企業内小集団活動として展開された戦後日本の品質管理はある種の計画と実行の統合であったという仮説に立脚し、そのような統合がいかんにして可能であったのかという問いを提出する。著者は日本企業の好況による影響などの要因による説明の可能性をマクロデータを用いて慎重に退けつつ、技術者と技能者のあいだの相互作用抜きには、品質管理は小集団活動として展開しえないという見方を示す。ところが、伝統的に生産工程において技術者と技能者のコミュニケーションが希薄であったことがつとに知られている。では、いかんにして日本の生産工程において技術者と技能者は品質管理に関して相互作用しえたのか。そこで、著者が注目する要因が、技術者のなじんだ統計的品質管理手法を技能者に理解可能なかたちに変形し、技術者に対する技能者の信頼を取り付ける工夫である。そのような工夫として、著者は簡便法のパッケージ化を取り上げ、その形成、定着、展開、適応過程を記述、分析する。

本論文は、簡便法のパッケージを構成する諸要素（特性要因図、パレート図、ヒストグラム、チェックシート、散布図、管理図、層別）に分解して、パッケージの形成、定着、展開、適応を、個別職場の社会的文脈の異同を慎重に吟味しつつ追跡する周到さを備えている。労働過程の質の変容にかかわる論点の一般化をめぐって議論すべき余地を今後に残してはいるものの、簡便法のパッケージ化による品質管理の受容と定着という著者の基本的主張に沿って、従来の経営社会学からも労働社会学からも研究の盲点となってきた社会過程としての品質管理運動の動態を明らかにした貢献は大きく、十分に高い学術的価値を備えているものと判断することができる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するにふさわしい水準に達していると判断する。